

平成二十三年

国語

(60分 120点)

注意

- 一 試験開始のチャイムが鳴るまで、表紙を開いてはいけません。
- 二 試験開始のチャイムが鳴ったら、まず解答用紙の決められた所に受験番号を書き、問題のページ数を確かめてから始めなさい。
- 三 問題は十七ページまであります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげなさい。
- 四 印刷のはつきりしていない所があったら、だまって手をあげなさい。
- 五 試験終了のチャイムが鳴ったら、すぐ鉛筆を置き、解答用紙を、表を上にして問題用紙の上に置きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その次の日も、直子^{なほこ}はちゃんと学校に来ていた。教室の後ろから入ったところで、直子のせなかを見つける。昨日と違って、いつもどおりの早めの登校。直子は、自分の席に座って、ひとりでいた。学校に来なくなる前と同じように、ノートに絵を描^かいてるみたいだった。

澄子^{すみこ}はとりあえず、しずかに自分の席についた。

澄子はあたりを見回す。

もう今日は、みんなで直子を囲んだりしない。

いつもの朝のクラスの風景。

それぞれに仲良しの子でかたまつて、おしゃべりしている。

「もう、心配してたんだからね！ 良かった、直子が学校にきてくれて。私、うれしいよ」

なんて笑って話しかける自分を想像してみる。

澄子は、頭をかかえた。

できない、と思った。①私はそこまで鈍感^{どんかん}じゃない。

じゃあ、どうすればいいんだろう……。

そんなことを悩^{なや}んでいるうちに、てっちゃんが澄子に近づいてくる。

「グッド、モーニン！」

いつもの朝のあいさつ。

「グッド、モーニン！」

カコがつづいてやってくる。

もちろん、直子にもきこえているだろう。

直子とはやらない合図。

今朝はもう、直子を特別あつかいする子はいない。昨日とはまるで違う一日のはじまり。

教室はいつものムードにもどっている。②お祭りは終わったのだ。

澄子もこれまでどおり、そんな直子の様子をただ見ていることしかできなかった。てっちゃんやカコと過ごしながら、ふたりにはわからないようにちらちらと直子を見るだけ。

そうして過ぎた長い一日。

「た、だいま……」

家に帰った澄子の声は、つぶやきにしかならなかった。

そんな澄子にお母さんはやっばりのんきな声で「おかえり〜」と言って、台所のテーブルでザッ¹シをめぐっている。

澄子は自分の部屋^{へや}にもどらずに、そのまま台所に行つて、お母さんに向かって言った。

「直子、来たよ」

「えっ？」

お母さんがザッ¹シから顔をあげる。

「直子、学校に来た」

澄子は情けない気持ちでいっぱいだった。お母さんに話すなんて、子どもっぽくことはしないって決めてくせに、澄子はもうこの気持ちを吐^はきださずにはいられなかった。

澄子はそこで、お母さんに内緒^{ないしょ}にしていたことをいつきに説明した。

直子が学校に全然来なくなっていたこと。てっちゃんたちと直子の家に行ったこと。そして、しまいにはクラスの女子の集団で、直子の家に行つて無理やり直子に会ったこと。そして、直子が学校に来た昨日と今日の教室の様子も全部。

お母さんは澄子の話を途中で口をはさむことなく、しずかに、まじめにきいていた。そして、説明が終わると表情を変えることなく言った。

「それで、澄子は直子ちゃんとしてっちゃんたちと、どっちを選んだの？ どっちと仲良ししていることに決めたの？」
澄子はすぐに返事ができない。

「決めなきゃいけないでしょ？ どっちかに決めなきゃならないでしょ？」

お母さんが責めるように言うから、澄子は泣きたい気持ちになる。だけど、澄子はそれをぐっとこらえてこたえた。

「てっちゃんたち……かも」

そう言う澄子にお母さんが容赦なくつつこむ。

「かも、じゃなくて、はっきり決めなさい」

お母さんの口調はいつにもましてきつかった。

「……てっちゃんたち」

澄子は今日一日のことを思い出してこたえる。今日も、直子とは口ひとつきいてない。だからそれは、直子と仲良しになることを選んでない自分を思い出して、出てきた答えだった。

「じゃあ、それでいいじゃない」

あまりにタンジュンに納得しているお母さんに、澄子はますます泣きたい気持ちになった。

「そんなわけじゃない……」

泣きたい気持ちをこらえてるせいで、声がふるえる。

「気にならないわけじゃない！」

澄子はなんとか自分をふるいたたせてつづけた。

「直子とは三年生のときから仲良しだったんだよ。カステラ作る約束だったのに、ノートに絵だって描いてもらったのに、い

つもいつしよにいたのに、うらぎるみたいにして、てっちゃんたちと仲良くなんてしてられないよ。直子をひとりぼっちのままになんて、させられないよ！」

「じゃあ、直子ちゃんを選んだらいいじゃない」

お母さんがとがった声で言う。

「そんなに気になるなら、直子ちゃんを選べばいいじゃない」

「それができないから悩んでるんじゃない」

「できないじゃなくて、選ばなきゃならないの」

お母さんはそこで、小さくひとつ呼吸をした。

「どっちもほしいなんて、よくばりよ」

「よくばり？」

思ってもみない言葉に、澄子は愕然とした。

「澄子はあきらめなきゃいけないの」

「あきらめる？」

「そう、どっちかを選んで、どっちかをあきらめなきゃいけないの」

お母さんのこんな真剣な顔を見るのは、はじめてだった。

「これから、大きくなるにしたがつて、選ばなきゃならないことはたくさん出てくる。そのとき、大事なものは、あきらめることだってお母さんは思う」

そこにいるのは、いつもの、のんきで明るいお母さんじゃなかった。

「あきらめるってことは、けして、悪いことじゃないの。あきらめることは、よく考えて選ぶなおすことよ」

お母さんらしくないその口調が、澄子を緊張させる。

「お母さんだって、たくさんあきらめてきたよ。でも、ぜんぶ自分で納得してあきらめてきたの。悔しかったり、かなしかったりしたけど、だけど他の道を自分で選びなおして進んできたから、後悔はしてない。進みたい道がどうしても開いてくれなかったら、あきらめて他の道を選ぶしかないの。それは逃げるんじゃない、新しく選びなおすことなの」

お母さんのきつぱりとした言葉が、澄子の心をぐさりと刺す。

「それに、中途半端な気持ちのまま進んだら、きつと後悔する」

⑤ お母さんの澄子を見つめる目が、あまりに強くて、まっすぐに、澄子は目をそらして逃げることはできない。

「後悔するって、苦しいわよ。あきらめるより、ずっと自分を傷つけるのよ」

その言葉に、心がじんじんとしびれる。

「お母さんは、澄子に後悔してほしくない。マヨってるなら、ちゃんと選んでほしいし、そのためには、しっかりとあきらめてほしい」

お母さんはそこまで言うと、はあと大きなため息をついた。

澄子も、そしてお母さんも、すごく疲れていた。こんな風に、真正面に向かい合って真剣な言い合いをするなんて、はじめてだったから。

ふたりして、しばらくぼうぜんとする。時計のビョウシンの音がやけに耳につく。

「……わかった」

先に立ちなおったのは、澄子の方だった。

「やっと、わかった気がする……」

澄子はぼそぼそとした声で、でもすっきりとした頭で決めていた。

本当ははじめから答えは出ていたのだ。

澄子にとって、気になってしかたないのは、直子の方だ。

澄子は自分からてっちゃんたちを選んだわけじゃない。もし、てっちゃんたちが、同じ塾じゃなければ、向こうから声をかけてくれなかったなら、仲良くなることはなかった。自分から気になって、声をかけたいふたりじゃなかった。

澄子は四月のクラス発表の日を思い出す。澄子は直子といっしょのクラスでうれしかったのだ。マッキーやしまちゃんじゃなくて、直子がいっしょでうれしかった。

澄子は直子にあこがれていた。イラストレーターになりたいというはつきりとしたユメを持って、ちゃんと今からそのための努力をして、澄子が頼めばこころよくどんな絵でも描いてくれるやさしい直子が好きだった。

てっちゃんたちと塾がいっしょでも、澄子は学校では直子と仲良くすることを、ちゃんと選んでいたのだ。

そして今も、ひとりぼっちでいる直子のことがこんなに気になっている。クラスの女子を動かしてしまうほど、気になっていたのだ。

「ちょっと……行ってくる」

澄子はその場で、セオったままだったランドセルと手さげぶくろを置いた。

お母さんが疲れた顔で「……どこへ？」ときく。

「選んだ方へ」

澄子はタシかな気持ちでそうこたえた。

「行つてらっしゃい……」

お母さんが力つきたような顔で、カタテをあげる。

「行つてきます！」

澄子はしつかりした声でそう言うと、ひらりと身をひるがえして玄関に向かった。そして、両足のかかとをしつかりと靴にはめこむと、そのまま外へと飛び出した。

澄子は直子の家へと向かいながら考えた。

今まで、どんな習い事をして、つづかなかった。

お母さんにさそわれるがまま、習いだして、でもつまんなくなってやめる。

おかげで、五年生にもなって、得意なことひとつない。

そんな調子だから、あいまいな気持ちで、いいかげんな態度で、うず¹⁰にマきこまれるみたいに、てっちゃんとかの仲間になっ
ていった。【ア】そして、直子が学校に來なくなったとたんに、やっぱり氣になつて、てっちゃんやカコ、クラスの女子までまき
こんで、直子の家におしかけた。

私はまるで、お母さんに、てっちゃんやカコに、クラスの女子のムードに、流されてるだけの小船だ。舵⁷のない小さなボート。

そして今、いきおいで直子に会うために、家を飛びだしてきた。直子に会いに行つて、なんて言うかも考えてない。会うのが怖
い……という気持ちもある。だけど澄子はそんな自分から逃げるように、かけたす。

直子の家に向かつて、走りつづける。

息が苦しい。足が重い。身体が休みたがつてる。直子の家が見えてくる。もう、歩いてもいいかな。そんな気持ちに、自分で×
印をつける。^⑧ちゃんと最後まで、走る。あと、もう少し……。【イ】

澄子は、直子の家の塀^{へい}に、タッチする。

到着^{とうちゃく}。

身体を曲げて、手をひざにあてて、はあはあと大きく呼吸する。心臓がどくどくと胸をたたいている。

しばらくそうして、身体を休めて、呼吸を整える。

ようやく身体が楽になったころ、勇氣が消えてしまう前に、澄子はおもいきつて、直子の家のインターフォンを押した。
しばらくすると、玄関が開いて、おとといと同じように、おばあちゃんが出てきた。

「私、浅川澄子つています……直子ちゃん、いますか？」

まだ、整わない呼吸のせい、とがった声になつてしまう。

「はっ、はい、いますよ」

おばあちゃんは、澄子のとがった声に、びくびくしているみたいだった。

「その公園で待つてゐるつて伝えてください」

声だけじゃなく、顔もこわばつてゐるのが、自分でもわかる。

【ウ】

「待つてゐるつて伝えてください」

ただならぬ様子の澄子に、おばあちゃんがげんな顔をする。

だけど、今の澄子にお愛想^{あいさく}をふりまく余裕^{よゆう}はない。

澄子はそれだけ言つと、頭をさげてその場を走り去つた。

自分の部屋を見せたがらない直子の家や部屋にあげてもらおうなんていう、ずうずうしいことはできない。それに、おばあちゃん
が直子に澄子がたずねてきていることを伝えてくれたとしても、素直に会いに来てくれるかどうかなんてわからない。

それでも澄子は、ブランコに座つて、直子を待った。公園には他にだれもいなくて、しずかだった。足もとのざつ草が、ひらひ
らとゆれている。

逃げだしたい。

【エ】

ふと、視線をそらすと、ゆっくりと白い靴が近づいてくるのがわかつた。

あわてて顔をあげる。そこには直子が立つていた。

澄子はあわててブランコから立ち上がった。あわてたものだから、ブランコが大きく揺れて、それがふくらはぎにおもいきりぶ
つかる。

「イテ」

澄子は自分のふくらはぎに手をのばす。

「大丈夫？」

「うっ、うん、大丈夫……」

澄子がふくらはぎをさすりながら、痛いのをごまかすように笑うと、直子も口を横にのぼして、少し笑ったような顔をした。

直子と交わす久しぶりの会話が、こんな風にはじまるとは思ってもみなくて、澄子はごまかすようにへらへらと笑ってみせた。

【オ】ブランコのギコギコした音がやけに耳につく。

「私……」

おもいきって声を出すのに言葉がつづかない。

直子はそんな澄子を不思議そうな顔で見ている。

「私、アヤマりたくて……」

【力】

⑨ 心臓がどくどくと胸をたたく。

「直子をひとりぼっちにして……」

緊張しすぎて、うまく言葉がつづかない。

「すごく、すごく……」

「スミのせいじゃないよ」

声をつまらせる澄子のかわりみたいに、突然、直子が言った。

「学校休んだの、スミのせいじゃないから」

直子はそう言うと、ブランコの囲いにちょこんとおしりをのせた。

「でも……私、クラスでてっちゃんやカコといっしょにいるようになって、直子をひとりぼっちにさせたじゃん」

そんな澄子の言葉に、直子は首をかしげた。

「私、それくらいで不登校になったりしないよ」

直子はそう言うと、フフフとおかしそうに笑ってみせた。

「それに、スミが気にしてくれてるの、知ってたし」

思ってもみない直子の言葉に、澄子はあぜんとした。

「じゃあ、どうして？ どうして、不登校なんて……」

「ただ、親をコマ¹²らせたかっただけ」

直子はそう言うと、ペロツと舌をだした。

「お母さんずっとケンカしててね」

うつむいて、靴で足もとのじやりをかきまわしている。

「最近、お母さん、ザッシの取材を受けることが多くなって……」

一瞬しかめた顔が、すごく悔しそうだつた。

「私の部屋を、勝手に写真に撮って、ザッシに載せたんだよ」

顔をあげて、不満そうな顔を澄子に見せる。

「やめてって言うてるのに、そういうこと何度もするの……」

くちびるをきゅつとかんで、またうつむいてしまう。

「部屋だけじゃなくて、私のためにつくったっていう洋服を紹介して、私がよろこんで着てくれるなんてウソ言ってるさ」

靴で地面を小さく蹴っている。

「私、そこに載ってる洋服なんて、一度も着たことないんだよ。なのに、その洋服の横に直子ちゃんのお気に入りとか書いてある」

の

まるで不満をぶつけるみたいは何度も何度も砂を蹴る。

「子どもって不自由だね。部屋のインテリアも着る服も、自分で選べなくてさ」

直子がこんなに強く何かを主張するところを見るのははじめてだった。

「だから、ひきこもりになってやるって、不登校になってやるって……」

見たことのない直子の強い口調に、澄子はあせんとするばかりだった。

「でも、おばあちゃんに見はられるようになって、だったら、学校行ったほうがいいやつて、ちようど思ってたところだったんだ」

私はいつたい直子の何を見ていたのだろう、と澄子は思う。

「だけど、佳織とかに部屋見られて、大騒ぎされちゃうし……学校に行けば行つたで、みんなに大騒ぎされちゃうって……昨日はまるで教室の祭りだったよね」

直子は、しずかでおとなしい子としか見ていなかった。

「こんなことになるなら、もう少し早く学校にもどれば良かったな」

そんな、親に強く反発するような子だったなんて、想像もしなかった。

「だから、スミは……てっちゃんとカコと仲良くしていいよ。私は、大丈夫だから」

なんて、まぬけなのだろうと自分がイヤになる。

「せつかく気にいられてるんだし、あのふたりは、へたにテキにしないほうがいいしき」¹³

三年生からいっしょにいたくせに、どうして気づかなかつたのだろう。

「間島さんとかも、ひとりでやつてるじゃん？ 私もべつにひとりでいい。大丈夫だから」

こんなに自分がかかりしたことはない。

「なんか、私、自分がバカに思えてきた」

澄子は、がつくりと肩をおとして言った。

「スミはバカなんかじゃないよ」

直子は、あわててヒテイしてくれる。¹⁴

「スミが私を本気で心配してくれてるのは、ちゃんとわかつたもの。三年生からいっしょにいるんだもん。それくらい知ってるよ」¹⁵

⑩ だけど、澄子は落ちこむばかりだった。

「今日は、わざわざ会いに来てくれてありがとう」

直子はそれだけ言うと、さつさと家にもどっていった。

澄子は何も言えず、ただ、その後ろ姿を見送るしかできなかった。

そして今、直子と話して、離れていくそのせなかを見て、はつきりとわかつたこと。

それは、ミス¹⁵てられていたのは、自分の方だったってこと。直子はちゃんと知っていたのだ。うずにまきこまれるみたいに、無理やりてっちゃんたちの仲間にされていく澄子のことを。ちゃんと見ていてくれたのだ。

それだけは、はつきりとわかつたのだった。

問1 線部1～15のカタカナの部分を漢字に直しなさい。

問2 線部①「私はそこまで鈍感じゃない」(2ページ)とありますが、澄子はどういう行動を取ることを「鈍感」だと思っていますか。七十字以内で説明しなさい。

問3 線部②「お祭り」(3ページ)とありますが、どのようなことを「お祭り」と言っているのですか。四十字以内で説明しなさい。

問4 線部③「澄子はもうこの気持ちを吐きださずにはいられなかった」(3ページ)とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 久々に学校に来た直子をクラス全体でもつと気づかうべきなのにみんながそうしなかったので、とても悔しかったから。
 イ 直子と元通り仲良くなるにはどうしたらいいか、お母さんが解決するための相談につてくれるはずだと期待したから。
 ウ 直子をみんなでひとりぼっちにしていたことを今まで言わなかった後ろめたさにたえきれず、母親に話したかったから。
 エ 直子に声はかけられなかったが、直子が学校に来られたのは自分が力を尽くしたからだと誰かに聞いてほしかったから。
 オ 直子に話しかけたのに実際にはできなかったという苦しい思いを、もはや自分だけでは抱えきれなくなったから。

問5 線部④「澄子はますます泣きたい気持ちになった」(4ページ)とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いつもどおりののきななお母さんに納得がいかず腹が立ったから。
 イ お母さんが自分の考えをきつい口調で押しつけるから。
 ウ 直子と付き合わなくてもよいとお母さんが冷たく言ったから。
 エ 自分の悩みにお母さんがしつかり向き合おうとしてくれないから。
 オ 素直すぎるお母さんが自分の嘘を見抜けないのがっかりしたから。

問6 線部⑤「お母さんの澄子を見つめる目が、あまりに強くて、まっすぐで」(6ページ)とありますが、これは「お母さんの目」がどのようなものであることを表していますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 澄子に自分が正しいと考える行動を強い調子で押しつけようとするもの。
 イ 澄子の本当の気持ちを何とかしてつかもうとする愛情を表わすもの。
 ウ 澄子に正しさについて考えさせ一刻も早い決断をせまろうとするもの。
 エ 澄子に自分の言いたいことを伝えようとする意志の固さを表わすもの。
 オ 澄子に直子を選ぶことが正しい判断だとはつきり教えさそうとするもの。

問7 線部⑥「力つきたような顔」(7ページ)とありますが、それほどに一生懸命話したお母さんは、澄子に何を望んでいますか。四十字以内でまとめなさい。

問8 線部⑦「舵のない小さなボート」(8ページ)は何をたとえていますか。二十字以内で説明しなさい。

問9 — 線部⑧「ちゃんと最後まで、走る」(8ページ)とありますが、澄子がそう思ったのはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 今まで何の行動も起こせなかったため、今回は違うことを直子に示したかったから。
 イ やつとのことで勇気を出したので、自分の心の弱さに決してまけたくなかったから。
 ウ 最後まで走りきる我慢強さがなくては、真に友達のためになる行動はできないから。
 エ 走るのをやめると同時に、直子を救いたいという自分の思いまで消えてしまうから。
 オ 歩くことは心のゆるみにつながり、直子と真剣に向き合うことができなくなるから。

問10 本文からは次の文が抜けています。本文の【ア】から【カ】のどこに入りますか。最も適切な箇所を選び、記号で答えなさい。

何度もわきあがるその気持ちを、ぎゅうぎゅうと心の奥におしこめる。

問11 ~~~~~線部a「お愛想をふりまく」(9ページ)・b「あぜんとした」(11ページ)とありますが、ここでの意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

a お愛想をふりまく

b あぜんとした

- ア 良い感じを与えるようにふるまう
 イ 礼儀正しくおだやかに言う
 ウ こびるようにやさしく話を聞く
 エ 言いたいことを必死にうったえる
 オ 自分をはげますように明るく話す

- ア 強い感情をおさえられなかった
 イ 事の意外さに言葉につまった
 ウ ショックを受けひどく落ち込んだ
 エ うんざりして元気をなくした
 オ こみ上げる気持ちをしずめた

問12 — 線部⑨「心臓がどくどくと胸をたたく」(10ページ)とありますが、これは澄子のどのような様子を表わしていますか。五十文字以内で説明しなさい。

問13 — 線部⑩「だけど、澄子は落ちこむばかりだった」(13ページ)とありますが、それはなぜですか。本文全体の内容をふまえて百二十文字以上百四十文字以内でまとめなさい。

問14 本文の特徴について説明したものととして適切でないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「心がじんじんとしびれる」の「じんじんと」のような言葉を多く使って、登場人物の気持ちを印象的に表わしている。
 イ 多くの人物の目から見た澄子を描きわけること、ひとつの角度から見たのでは分からない澄子の強さをとらえている。
 ウ 周囲の人々に助けられてさまざまな苦勞をのりこえ、心の成長をとげていく少女の姿が感動的に描かれている。
 エ 友達との関係のなかで揺れ動くという誰にでも起こりうる心理を、少女の心を通して丁寧に描いている。
 オ 主人公の周囲の登場人物に意外な一面を持たせることで、それぞれの人物の個性をはっきりさせている。
 カ 「絵を描いている」ではなく「描いている」とするなど、ややくだけた表現を使うことで親しみやすさが増している。

(特に指示がない場合は、や。も一字に数えます。)

受験番号	
国	語

問 1		
11	6	1
12	7	2
13	8	3
14	9	4
15	10	5

[illegible][illegible]

問 4

問 5

問 6

[illegible]

問 8

問 9

問 10

問 11

a

b

問
12

問
13

問
14

[illegible]

(二十字×十行)

【下書き用紙】

この用紙は自由に使うてかまいません。終わったら問題用紙とともに持ち帰ってください。

[illegible]

(二十字×十行)